あー怠い。
最近寒くなってきたし。ベッドから出るの面倒臭え。
今日も学校か。つか今日何曜日？
はーあ。
あー、マジ怠ィ。
深々と溜め息とも欠伸ともつかない吐息を零して、政宗はもぞりと掛け布団の中の温もりを堪能して、一度ぎゅっと目を瞑ると意を決したようにして、がばりと起き上がった。
うお、寒ィ！
延々と鳴り続けていた耳障りな目覚まし時計の音をばん！　とひと叩きして止めると、今度こそ政宗は猫のように伸び上がってベッドから這い出た。
「くっそ、今日も寒そうだなァ」
そういや今日ってバイトもある日じゃね？
そう思うと益々憂鬱になるが、しょうがねえと首を振って洗面所に向かう。諸事情で一人暮らしの身の丈に合った２ＤＫのアパートは、寝室にしている部屋から出れば、居間兼食卓にもなる部屋を通らないと風呂や洗面所には向かえないので、自然とその部屋に足を踏み入れて、日常の習慣化した作業をする。政宗は冷えてくる爪先から這い上がってくる寒気にぶるりとして、さらに寒いだろう洗面所へと向かったのだった。
足元に忍び寄る寒気につま先を擦り合わせていれば、先程通りすがりにリモコンでスイッチを入れたテレビが何やら今日のニュースだとか天気予報だとか一頻り喋っていて、あ、と思う。

顔を洗って歯を磨きながらフラフラと居間に来てみれば、丁度占いのコーナーの真っ最中で。
「本日水曜日の皆さんの運勢はいかがでしょうか？」
何が楽しいのかウキウキした様子で巷で可愛いと評判の女性アナウンサーが、それでは発表です、と告げると今日の占いコーナーと、ポップで楽しげな画面が現れて、何でそっからなんだよ、といつも白黒はっきりつけたいタイプの自分にしたら、不思議でならない順位から始まる占いに目をやる。
ぼんやり眺めながらも、あ、まだ水曜なのかよ、と舌打ち一つ。やっぱり今日はバイトもある日じゃねえか、と少し渋い顔で。
「今日の六位は天秤座のあなた！」
へー、と思いつつも見てしまう。何で六位からなの？　何で飛び飛びでいきなり八位？色々思うけど、それも好奇心を煽る制作意図なんだろうと思いつつ、中々自分の星座が出てこない。って事は一位か最下位かどっちかじゃねえ？　これも一種の惹きつけ効果だよなァ。
政宗は歯ブラシを握ったままボーっと画面を見入る。
「さて、今日の最下位は……」
思わせぶりな前振りがあって、ざんね～ん！　と、ちっとも残念そうじゃない明るい声がしたあとに、獅子座のあなた！
やけに明るく響いた声を背に、政宗は泡だらけの口を濯ぎに洗面所に向かうのだった。
じゃばじゃばと水を流して、ぶくぶくぺっぺとこれでもかとうがいをして、もう一回顔を濯いで、聞きたくなくても聞こえてしまう距離にあるテレビの音を拾ってしまう。

いやいやいや、それはねえか。
何度も自問自答して、お湯に切り替えたシャワーを無駄に浴びて流石に逆上せてきそうで、政宗は風呂から出た。
それでも、今日本当に心が折れそうで、いや、もう半分折れていたところで、唯一本気で思った弱音を、望んだ事を、叶えてくれたのは他でもない幸村で。
自分の頭をバスタオルでがしがしと拭いていると、場所が場所なだけに、幸村に先程ぽんぽんと撫でてその後に優しく撫でられた事が、厭でも思い返される。あれが、本当に凄く心地よくて。ぶわっと自分の体中の血が顔に集まって、びしょ濡れで半分折れかけていた心が急に軽くなったようで、そのくせ心臓はばっくん！　と音が外に聞こえるんじゃないかと思う程、爆発したみたいになって――。
思い出して、シャワーのせいだけじゃない熱が頬を火照らせる。あー俺ァ一体どうしたってんだ。平常心、平常心、と呟くようにして自分に言い聞かせて、政宗は幸村がいるだろう居間に戻ったのだった。

「あ、政宗殿」
案の定起きて待っていたらしい幸村は、先程はいかがされた、とすぐさま心配事を尋ねてきて、政宗は、いや別に、と些か無愛想に答えた。

「大丈夫なら良いのですが」
幸村が本当に大丈夫？　とでも言いたげに、バスタオルが乗ったままの政宗の頭を一つ二つ撫でてきて、再び政宗の心がふわっと温もる。
ああ、この仕草が、堪らなく――……。
思って、顔が熱くなる。
俺、今何て思った？
もうすっかり幸村のお陰と言うか、せいと言うかで、ついていない事もなくて、それによって凹んでいた気持ちも大分浮上してきていて、寧ろ今は今までの色々よりも、こうして今までにないぐらいにすぐ傍にいる幸村が気になって仕方がない。
そう、こうして良い子良い子とされるのが嬉しい、気持ち良い、と思ってしまうぐらいには。
その優しげな仕草が、好きだと、思ってしまうぐらいには――。

心地良さに目を瞑ってしまった政宗の、その安心したような表情に政宗を撫でる幸村の手が止まる。湯上りのせいか、僅かに上気した頬が薄く色付いていて、濡れた黒髪が艶めいていて、いい匂いがして。それが、同じ匂いが自分にも少しばかり残っていると思うと、カーっと幸村の全身が火照る。腹の底から燃えるように熱くなってきて、馬鹿！　某は何と破廉恥な！　と内心で自分を叱責したものの、政宗のふわんと緩んだ口元に、うっとりとでも言うのが相応し

い柔らかさで閉じられた瞼に、益々惹きつけられて、幸村はそっと撫でていた手を離した。
これ以上傍にいては、よからぬことになってしまいそうで、そうなれば、自分が恐ろしいし、政宗に嫌われてしまうかもと思うと、自然と政宗から手を引く事ができるのだ。
ゆるゆると撫でていた手の温もりが、自分の頭の上からなくなって、政宗は些か不満げに目を開いて口を尖らせた。